

「ジャパニーズ・アメリカン」
 アメリカ合衆国には1,220,922人(2007年)の日本人を祖先とするアメリカ人が住んでいる。日系アメリカ人と呼ばれる彼らの祖先は、今から約100年前、家族のためアメリカに出稼ぎに渡った。不幸にもその間に母国・日本とアメリカの間で太平洋戦争が勃発した。彼らは「敵性外国人」として住んでいた町から追放され、砂漠の真ん中に建てられた檻の中に閉じ込められた。「強制収容」。ユダヤ人の強制収容について知っている人は多いが、我々と同じ日本人がアメリカ政府によって収容施設に入れられていたという事実を知らない人は意外と多い。

2012年11月初旬。筆者はアメリカ・ロサンゼルスを訪れた。そして日系人の苦悩の歴史を知るために、リトル・トーキョーにある全米日系人

博物館に足を運んだ。

「全米日系人博物館」
 ユニオン駅からゴールドラインで一つ目。リトル・トーキョー/アーツ・ディストリクト駅を降りて目の前にある建物が全米日系人博物館だ。入館料は大人\$9、学生\$5だが、第三木曜日12時～20時及び毎週木曜日17時～20時は無料である。

強制収容時、
 日系人の集合場所となった西本願寺跡にその記憶を忘れないよう、1969年に建てられた。

(写真1) リトル・トーキョー／アーツ・ディストリクト駅



(写真1) リトル・トーキョー／アーツ・ディストリクト駅

ディスカバー・ニッケイ 梶山、ロサンゼルスへ行く。

外国語学部
 英語英文学科 4年

梶山 紫

1階には若い日系アメリカ人たちのアート作品が展示されており、さながら美術館のような様相だった。一変、2階へと上がると強制収容所内に設置されたバラック(簡易住居)を再現した建物が出迎えた。この狭く殺風景な部屋で家族、時には見知らぬ者同士が身を寄せ合い砂漠の真ん中のマンザナー収容所で寒さや砂埃と戦っていたのだ。

収容所を俯瞰した模型図を見ると、長屋のようなバラックが整然と並んでいて、住む場所ではなく、あくまでも人を収容するための施設である事を示しているかのようだった。

農作業風景や港の様子など入植初期の写真の後、太平洋戦争に至るまでの資料のコーナーがある。反日的な内容を書いた新聞や、立ち退きを命じる文書などが展示されている。収容所の風景の写真の後に、アンケート用紙が展示されている。



サクラダ・ファミリア内部

正直に言うと、金銭面などで行くことを少しためらっていたが、行かなかったら絶対に後悔していたと思う。積極的にならなければ何も始まらないこと、思い切ることの大切さ、自分にまだまだ足りないことなど、この夏の経験が、自分を見つめ直す機会をくれた。そして、スペインにもっと興味を持つようになり、以前よりも日本の外の世界に目を向ける視野が広がったと思う。

いろいろと書いてみたが、ここに綴ったことはごく一部で、伝えきれない程に貴重な時間を過ごしたと断言できる。

また「Hasta luego」と言えるような素敵な出会いが出来るように、この夏の経験をこれから続く日々を生かして様々な事に挑戦していきたい。

【スペイン周辺の地図】

<http://cannery.la.coccan.jp/SpanPortugal2002/Map.html>



これが忠誠登録用紙 (Loyalty Oath) である。
1943年2月、徴兵年齢の二世男子を対象に忠誠登録が実施された。この登録で重要とされたのは以下の2つの問だった。

27. Are you willing to serve in the Armed Forces of the United States on combat duty, wherever ordered? (第27問 あなたは合衆国軍隊に入隊し、命ぜられたいかなる戦闘地にも赴き任務を遂行する意志がありますか?)

28. Will you swear unqualified allegiance to the United States of America and faithfully the United States from any or all attack by foreign or domestic forces, and forswear any form of allegiance or obedience to the Japanese emperor, or any other foreign government, power, or organization? (第28問 あなたはアメリカ合衆国に対し、無条件の忠誠を誓い、内外のいかなる武力による攻撃からも合衆国を忠実に守り、日本国天皇あるいは他の国の政府や権力組織に対し、あらゆる形の忠誠や服従を拒否しますか?)

強制収容を受けたのは日本人である一世だけではなく、アメリカ生まれで市民権を持っている

まるなら自決しろ、という戦時教育を受けていた日本人たちに方言を使って声をかけ、死を選ばないように説得したのだ。

MISの婦米二世といえば山崎豊子の「二つの祖国」の主人公・天羽賢治が思い浮かぶが、もしかしたら2011年8月にフジテレビジョン系列で放映されたスペシャルドラマ『最後の絆 沖繩・引き裂かれた兄弟』鉄血勤皇隊と日系アメリカ兵の真相』に登場する東江盛勇(あがりえ・せいゆう)氏の方が馴染み深いかもしれない。このドラマは日本兵になった16歳の弟と、MISになり日本人に投降を呼びかけるためにアメリカ兵として日本に来た兄が、地上戦の最中の沖繩で再会したという実話をもとにしている。弟役を佐藤健、兄・盛勇役を要潤が演じた。盛勇氏は沖繩の山中で沖繩の方言で投降するように説得にあたった。上手くないかなことが多かったと述べているが、彼によって助けられた命は多い。

「苦悩の時代を懐古する」

戦時中の資料展示に混じって、棚に10数冊のファイルが並べられているのが目に止まった。背にはそれぞれの収容所の名が記されており、それを開

子どもたち、二世も同様だった。しかし、戦争が長引くと、収容所を維持する費用がかかり過ぎること、そして、兵隊の不足が起こったため、二世たちの中から選抜してアメリカ兵にすることにした。その時に、アメリカに忠誠を誓うかどうか質問した用紙が、この忠誠登録用紙である。アメリカ人としてアメリカの学校に通い、アメリカで生活していたのにも関わらず、突然「お前たちは日本人の血が流れているから敵性外国人の日本人だ！強制収容する！」と言われて捕らえられ、その拳句「お前たちはアメリカ生まれのアメリカ人なんだから、国のために命を懸けて戦え！」と言われたのだから、二世たちの苦悩は計り知れない。しかし、ほとんどの二世たちが、日系人の汚名を返上するためにアメリカに忠誠を誓ったのである。(写真2)



(写真2) 全米日系人博物館

くと、何人ものプロフィール資料が出てきた。1枚1枚に名前、写真、住んでいた収容所の名前と過ごした時期、現在の住所と連絡先(原本ではなくコピーが置かれていたため、この項目は黒塗りにされていた)、メッセージが綴られており、これが、かつて同じ収容所で過ごした仲間との再会を願うための伝言板のようなものである事を知った。

強制収容され、住んでいた街から追われたのも突然だったが、強制収容所の終わりもまた突然だった。日本とアメリカの間の戦闘状態の終結に伴い、全ての強制収容所は1945年の10月から11月にかけて次々と閉鎖されていき、すべての強制収容者は着のみ着のまま元々住んでいた家に戻るように命令された。再定住という混乱の中、それまで同じ収容所内で暮らし、親交を深めていた者たちは別れの言葉もままならないまま、バラバラになった。年を重ね、当時を知る仲間との再会を願うのだろう。

日系人によって書かれた本も展示されていた。その中には筆者の研究テーマである日系アメリカ人二世のジョン・オカダによって書かれた *Nonno Boy* の初版もあった。忠誠登録して従軍した二世たちと反対に忠誠を拒否した「ノーノー・ボーイ」

「日系人兵士の活躍」

兵隊となった二世たちの一部は日系人だけで編成された部隊に所属し、ヨーロッパ戦線に送られた。これがアメリカ陸軍史上最強の部隊と呼ばれる「442部隊」である。2800人程の二世が所属しており、TBSで2010年に5夜連続で放送された「99年の愛」JAPANESE AMERICANS」の草なぎ剛演じる主人公もここに入隊した。彼らの合言葉は「God for broke!」(「当たって砕けろ!」、「死力を尽くせ!」)。自爆覚悟の死闘で死傷率300%以上、18000以上の勲章を受賞している、正に最強の部隊である。ドイツではナチス軍と戦い、ダッハウのユダヤ人収容所を解放に導いている。(この事実は近年まで公表されていなかった。)

442部隊以外にも大きな活躍を見た二世兵士たちがいる。それは婦米二世と呼ばれる学生時代を日本で過ごした日本語の堪能な二世兵士たちである。彼らはMISと呼ばれる情報部隊に所属しており、主に日本軍の無線の傍受、暗号の解読をしていた。彼らの活躍によって世界大戦が数年早く終わったと言われている。更に彼らは堪能な日本語を生かし、日本の戦地に赴き、市民や兵士に投降を呼びかけた。アメリカ軍に捕

「リトル・トーキョーを歩く」

博物館を出て、リトル・トーキョーを抜け、宿泊先であるウイルシャー駅ほど近くのホテルへと向かった。途中には「大和」や「大黒屋」など日本名の店が立ち並んでいた。アメリカにいるのにも日本にいるよう…。どこか不自然で、とにかく不思議な気分になった。

(写真3)

強制収容で日系人が西海岸から消えた後、アフリカンアメリカンのビジネスマンたちが住み着くように



(写真3) リトル・トーキョーの街並み

こんにちは。国際文化交流学科 学科祭スタッフの、3年生瀬戸亜里沙です。今年度でスタッフを務めるのは2年目でした。今年は、去年とは一味もふた味も違った学科祭にすることができました。

まず、10月末に Festival of Lingvo (言語の祭典)と題して、学習発表会を開催しました。今年初めての試みです。これは、今年退職なさる今年度の担当教授であり、国際文化交流学科を代表する教授である石井美樹子教授の長年の夢でもありました。

内容としては、国際文化全学年の学生に募集を募り、私たちの学科は必修となっている第二言語(韓国語、イタリア語、フランス語、ロシア語、ドイツ語、スペイン語他)を用いて、劇や朗読、ダンスやプレゼンテーションをしてもらいました。皆さん、この日のために各言語の先生に協力して

もらいながら準備をしてくれました。本番では、どのグループも外国語をまるでネイティブのように扱い、素晴らしい発表をしてくれました。また、国際文化の教授も審査員として沢山来てくださり、大変盛り上がりました。ちなみに、私は英語で司会も挑戦しました。英語で司会をすることはなんと前日に決まり、大急ぎでネイティブの後輩や先生にスクリプトを確認してもらいました。英語が大好きな私ですが、このようなことは初めてで、貴重な経験をさせてもらいました。

そして、11月には学科祭第二弾、Cross Culture Cafeを開催しました。今年の内容は以下の通りです。

● Cross Culture Cafe: カフェ
韓国、イタリア、スイス、ベルギー、パキ

スタン等世界各国のお菓子、神大シフォンの Sweets、お茶やコーヒーを提供
今年のカフェの雰囲気は雑貨屋の Afternoon tea をイメージして、白いレースやお花をディスプレイした可愛らしいものになりました。輸入のお菓子には1つ1つにそのルーツや説明を書いた掲示物を用意しました。お客さんに海外旅行気分を味わっていただくこともコンセプトの1つでした。

● 民族衣装ファッションショー
韓国のチマチヨゴリ、チャイナドレス、ベトナムのアオザイ、アロハシャツなどを国際文化の学生モデルが着こなしてくれました。ランウェイを用意し、モデルさんたちには各国の民族衣装の良さをアピールしてもらいました。また、クイズも用意しお客さんと一体となり盛り上がりました。

文化ウィーク(学科祭) 体験談

外国語学部
国際文化交流学科3年

瀬戸 亜里沙

なった。強制収容所が閉鎖された後、再定住が進み、戦前住んでいた112,000人の内、25,000人ほどの日系人がリトル・トーキョーに戻った。しかし、そこは戦前の面影はなくゴーストタウン化しており、他人種の反対もあり日系人が生活していくのは困難だった。その後長い年月をかけて気の遠くなるような努力で日系人達はリトル・トーキョーを観光地として再興した。

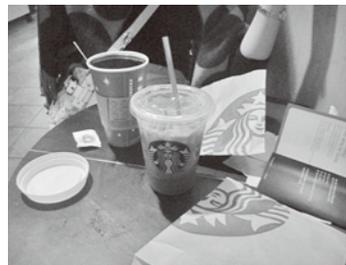
リトル・トーキョーには日本の店も多く進出している。複合商業施設の中に紀伊國屋書店があった。日本の書籍や雑誌が置かれているのはもちろん、何よりも漫画の取り扱いの豊富さに驚きが隠せなかった。雑誌も漫画も売られているのは最新刊で、ここに来れば日本に住んでいる時と遜色なく情報を得ることができるだろう。(ただし、輸入しているため、日本で買うよりちよつと値段が高い。)

【まとめ】

スターバックスコーヒーで働く日系人の大学生と思われる青年と出会った。彼は私たちを見ると日本語で話しかけてきてくれた。そして、アイスコーヒーにガムシロップを入れてくれた。基本的にアメリカにはガムシロップがない。少し薄い、

いわゆるアメリカンコーヒーが売られているため、他の店舗ではブラックのまま渡された。しかし、彼は、ごく当たり前のように「ガムシロップ要ります?」と聞いてくれた。そんな心遣いが妙に嬉しかった。カフェイン中毒の私はこんな所に文化の融合を感じてしまうのだ。(写真4)

日系人二世部隊の活躍とアメリカ国家への多大な献身によって、日系人は「模範的マイノリティー」として賞賛までされるようになる。その後、日系アメリカ人議員や日系アメリカ人団体の地道な活動を受け、1976年にジェラルド・R・フォード大統領が強制収容は「間違い」であり「決して繰り返してはいけない」と公式に発言した。



(写真4) スターバックスコーヒー店にて

戦争に直面した二世たちはアメリカへの同化を推し進めようとしたが、その子どもたち三世らは一世の世代の生き方に注目し、日本の風習を再確認する傾向があったという。このように行ったり来たりを繰り返しながら、この街は日本とアメリカの溶け合った不思議な魅力を放つ街になったのだ。

参考文献

- Wilson, Robert A. Hosokawa, Bill. East to America: A History of the Japanese in the United States. 1980. New York: Morrow.
- 『ジャパニーズ・アメリカン』
猿谷要監訳 有斐閣選書1982年
- 竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ』
東京大学出版会1994年